

「真名」・「仮名」に見る日本文化

宮 偉*

1 はじめに

日本語の表記体系は、世界で類を見られないほど複雑である。漢字に仮名、ローマ字、さらに各種の符号もある。しかも、漢字には音読みと訓読みがあるし、仮名にも平仮名と片仮名がある。

「漢字」は、言うまでもなくその本家・中国から伝わってきて、日本人に改造されながらも日本語を表記する文字として利用されているが、「仮名」は、日本人が漢字をもとにして発明した、いわゆる日本自作の「文字」である。ローマ字は、特に第二次世界大戦後アメリカ文化一辺倒に伴ってその使用が多くなっているが、絵文字・顔文字等符号の使用はむしろ日本人の思考様式の表れでもと思われる。一文の中でも、例えば「全国のお店 & WEB で 8/18 (金) ~ 27 (日) に開催されるキャンペーンもチェック!」のように、漢字や平仮名、片仮名さらにローマ字などの表記が一体となって表れているのは、むしろ当たり前のように日本人には映る。

面白いのは、日本人自作の文字に充てられた「仮名」という呼び方である。「仮名」は「かりな」から「かな」に読み方が変わって、「仮の文字」との意味である。「仮」とは、『広辞苑』によると、「① 暫時それと決めること。

永久でないこと。まにあわせ。かりそめ。② 真正のものでないこと。にせ。いつわり。」となっている。そうすると、「仮名」とはつまり、「取りあえず間に合わせの文字」「永久でない文字」「真正でない文字」になっている。しかも仮名は、その誕生した平安時代から千年以上使われてきた今日でも、まだ「『仮』名」のままである。

「仮名」と対になって、あるいはその対極にあるのはもちろん「真名」である。「真名」はもちろん「正式の文字」「永久の文字」であり、中国という異国から伝わってきた「漢字」のことを指している。

異国から伝わってきた文字が「真名」と認めるのに対して、自国で作った文字が「仮名」と見なされるなんてことは、世界中どこを見てもない現象であろう。本文は、「真名」と「仮名」という呼び名から、日本文化の一端を垣間見ようとするものである。

2 「仮名」の誕生と日本の文字生活

日本は、日本語という固有の言語はあったが、漢字と出会うまでは文字がなかったのである。

中国の史書『隋書・倭国伝』によると、(日本は)「無文字，以刻木結繩記事。敬佛法，

* 中央学院大学社会システム研究所 客員教授 / 岡山商科大学 教授

于百濟求得仏經，始有文字（文字はなく、ただ木に刻みをいれ、繩を結んで（通信）する。仏法を敬い、百濟で仏教の經典を求めて得、初めて文字を有した）」との記述があり、日本人学者齋部広成が808年に作成した『古語拾遺』の序文にも、「蓋聞上古之世，未有文字，貴賤老少，口口相伝，前言往行，存而不忘。（聞くところによると、上古の世は文字が無く、貴賤老少問わず口から口へ伝えていたが、その言った事、行った事や出来事を忘れはしない）」との内容があつて、無文字状態にあつた日本のことを如実に記載してある。

それに対して、日本の近隣にある中国は、今から5000年前の庄橋墳遺跡で中国最古の文字を発見されたとの記事があつて世間を賑わしたが、少なくとも今から3000年前にすでに成熟した文字体系を持ったとされている。日本と中国文字との出会いは、紀元前3世紀前後、大陸からの移民によって実現できたと思われている。日本で出土された漢字の記された貨幣などがそれを証明している。ただし、その時の漢字は、神聖たる図案として日本人に認識される可能性が高かつた。漢字の公式的な日本伝入は、「于百濟求得仏經，始有文字」という『隋書・倭国伝』に記述があるように、4－5世紀前後、百濟の王仁の来日に始まつたと言われている。『日本書紀』にも、応神天皇（5世紀）の時、王仁が『論語』10巻と『千字文』1巻を持って来日し、「則太子菟道稚郎子師之，習諸典籍于王仁，莫不通達。故所謂王仁者，是書首者之始祖也（そこで菟道稚郎子は王仁を師とされ、もろもろの典籍を王仁から習われ、精通してないものは何もないようになった。いわゆる王仁は、書首（ふみのおびと）らの始祖である）」と書かれ、それが漢字の公式的な日本伝入とされている。その後、日本と中国、朝鮮半島の更なる交流に伴って、特に遣隋使、遣唐使の派

遣、律令国家の創立等によって、漢字は皇族、貴族から一般官僚、民衆にまで浸透してきて、日本語と体質的に合わないにもかかわらず、日本語を表記する公式的な文字となった。明治以降、中華文明の衰退、西欧文明の台頭に従つて、漢字廃止論、仮名文字論、ローマ字論さらに英語、フランス語切り替え論などいろいろ経てきたが、漢字は日本の表記体系の主役として、今日でも依然として強い生命力を見せている。

日本語の音韻体系に合っていて、日本人自作の文字としての仮名の誕生は、漢字が日本に伝入してから数百年後のことになったのである。

片仮名は、仏教が日本での普及とともにできたと考えられる。『日本書紀』によると、仏教が日本に伝わつたのは飛鳥時代の552年に、百濟の聖王（聖明王）により釈迦仏の金銅像と経論他が献上されたのが始まりだとされているが、その後、蘇我・物部の崇仏論争を経て、特に厩戸皇子（聖徳太子）の貢献により、国家鎮護の道具となり、日本で栄えてきた。そして、仏教の繁栄、普及に従つて、大量の仏典の読解と翻訳が必要になってくるわけであるが、「片仮名」はその仏典読解の必要性に迫られて誕生したそうである。当時、仏教徒たちが中国からの仏典を学ぶにあつて、まずは中国語の音読をし、それから師の解釈に従い、その中国語の経文を日本語に訓読したはずである。そして、その仏典の狭い行間、字間に訓読に必要な送り仮名、返り点などをつけるためには、どうしても漢字を省略して書く工夫が必要になってくる。そのように漢字を省略した形でできたのがいわゆる「片仮名」である。例えば、「阿」の左側のこざとへんから「ア」を、「伊」の左側のいんべんから「イ」を、「宇」の上部のうかんむりから「ウ」を作るのがそれである。「片仮

名」の「片」はつまり、「完全でない」の意で、漢字を意識して、漢字を基本に見据えての呼び方に違いない。

一方、片仮名の漢字省略化、漢字の一部だけ取る作業と違い、漢字の草書体から変化した形で、「平仮名」も発明された。例えば、日本語の「あ」と発音される万葉仮名の「安」の草書体から「あ」を、「い」と発音される万葉仮名の「以」の草書体から「い」を、「う」を発音された「宇」の草書体から「う」を作るのがそれである。片仮名は学問的な傾向が強いのに対して、平仮名は「女手」とも呼ばれ、最初は女性が使う文字とされ、私的性格が強いのである。ちなみに、「平仮名」は大體平安初期に出来上がり、「片仮名」と区別して、「平易な、あるいは非公式な平素の仮名」との意味から「『平』仮名」と呼ばれたそうである。

片仮名にしても平仮名にしても、大體平安時代に完成された。最初は字体もかなり個人差・集団差があって不統一が見られるが、片仮名は12世紀ごろ、そして平仮名は明治時代の『小学令施行規則』（1900年）によってやっと統一された。

3 仮名が漢字より劣位なのか

「仮名」は、日本人の発明した、日本語の音韻体系に合う文字体系であるが、前述したように、「取りあえず間に合わせの文字。永久でない文字。真正でない文字」とされ、誕生した当初から、「真名」である「漢字」より劣った文字、付屬的な文字とのラベルが貼られているようである。

いかにも「真名」である漢字より劣位にある文字に見える「仮名」であるが、日本語の表記体系ではどんな役割を果たしているのだろうか。

仮名ができたのは平安時代である。平安時代は、中国大陸にある唐王朝が安史の乱等により衰退し、菅原道真の提言をきっかけに、日本が遣唐使を廃止し、いわゆる「国風文化」と呼ばれる日本独自の文化が栄えた時代でもある。そしてその「国風文化」の背景にあって支えるのはむしろ仮名文字の発達である。

仮名文字は、漢字よりも平素で書きやすく、日本人としての心情を訴えやすくとされていたので、次第に幅広い層から支持を得られた。文学作品でいうと、『竹取物語』、『伊勢物語』、『源氏物語』のような「物語」、『蜻蛉日記』（藤原道綱の母）、『更級日記』（菅原孝標の女）、『紫式部日記』（紫式部）などの「日記」が、日本人の感性をよく掴んで伝える仮名文字によって書かれた。仮名の発達とあいまって和歌も次第に公的な文化としての地位を認められてきた。905年に醍醐天皇の命によって、日本初の勅撰和歌集『古今和歌集』が編集された。和歌は、天皇が詠む正規の歌でも全部仮名で書くというのが原則だったので、「実は仮名というのは、日本において決して漢字から特に低い位置と見られていたわけではない」のである。そして、「平安朝時代は和歌ができないと何もできないのです。…和歌でないラブレターなどを送ったら初めから軽蔑されてしまう」ほどである。文学だけでなく、実用面においても、「仮名文字とそろばんがないと戦争ができないと言われたわけですが、…、やはり仮名文字が書けないとだめで、第一メモが取れないということが出てまいります」そうである（中西進他、1991）。昔における仮名文字の重要性が垣間見ることができる。

現代日本語になると、「仮名」は「『仮』名」のままであるが、その役割が少しも劣ってはいない。

前述したように、現代日本語では、表記

体系が漢字、平仮名、片仮名、ローマ字、各種符号などさらに複雑になっている。そして漢字と仮名のそれぞれの役割分担を見てみると、漢字は主に「名詞・形容詞と動詞の語幹・日本の人名」を表記するに使われているが、平仮名は「形容詞と動詞の活用語尾（送り仮名）・助詞・漢字を持たない、あるいは漢字では読みづらい日本語の単語・漢字の読み方の指示（振り仮名）」等に使われ、そして片仮名は「外国の単語、名前・擬音語・強調・技術、科学用語」などを表記するというように、使い分けをされている。

現代日本語を見てみても、仮名の果たす役割がいかに大きいかがわかる。漢字は、概念的、抽象的な事物を表す名詞が多いが、仮名、中でも平仮名が、「日本語特有」の助詞、助動詞、動詞の活用及び「日本特有」の概念などを表すのに使われていて、粘着語としての日本語には特になくなくてはならない存在である。「日本語特有」、「日本特有」を表す仮名がないと、日本語としては成り立たないと言っても過言ではない。

例えば、肯定か否定かは仮名で示されている。「私は学生です。」と「私は学生ではありません。」では、漢字が一緒でも、仮名の違いによって、意味ががらりと変わる。

言葉の微妙なニュアンスの差も仮名の使用によって決まる。「私は学生です。」と「私が学生です。」とでは、「は」と「が」の違いによって意味が変わるし、「酒を飲む」と「酒に飲まれる」も正反対になる。「教科書を教える」と「教科書で教える」ではニュアンスがまた違うようになる。仮名一つでニュアンスがすっかり変わってくる。

また、仮名は日本人が発明した文字なので、日本人特有の感情や生活実感を生き生きと伝えるのにももちろん最適である。仮名は発明された当初「女手」と言われ、主に女性に使用

されるために、感情などを表現しやすいように発達してきたのも当然のことである。さらに、仮名は日本語の音をそのまま文に出来るので、ありのままの感情表現がしやすくなるだろう。

いずれにしても、漢字が「真名」と呼ばれ、正統の座に据えられてはいるが、決して仮名はなくてもいい存在ではない。仮名は、漢字には劣らずに日本語を表記し、日本人の心を表すことができる。

4 何故「『仮』名」なのか

仮名は、日本語の表記体系においては、少しも漢字に劣らない存在なのに、なぜ今日になっても「『仮』名」のままなのか。

確かに、仮名が誕生するまでの長い間漢字が日本の唯一の文字として日本の政治、外交、文学などで主役を演じて、仮名自身も漢字の一部あるいは漢字のイメージから誕生したので、仮名は、先天的に漢字に頭が上がらず、「三歩下がって師の影を踏まず」という謙虚さ、あるいは「自己卑下」があるかもしれない。

漢字は日本文化のまだ確立できていない時期に、強大な中華文明を背景にして日本に伝わってきたが、所詮中国語を表記するための文字なので、体質的にはどうしても日本語に合わない面がある。太安万侶が『古事記』の序文に書いてあるように、「然、上古之時、言意并朴、敷文構句、于字即難。已因訓述者、詞不逮心。全以音連者、事趣更長。（昔は言葉や心が素朴だったので、文章にすることがとても難しい。漢字を使って述べてみると、どうも心に思っていることが十分に表されていない。そこで、漢字の音だけを借りる方式で述べてみると、恐ろしく文章が長くなってしまう。）」とのことなので、漢字こそ日本の文字ができるまでの「取りあえず間に合わせ

の文字」と見ていいはずである。

それに対して、仮名は日本人が発明した、日本語の音韻体系にぴったり合うような表音文字で、「仮名を発明したことは、…最高の発明と言っていいわけで、もしも仮名を漢字から作りだすことをしなかったらならば、まず日本文化というのはなかったらろうと考えてよい」（中西進他、1991）のであろう。が、「『仮』名」のままである。

朝鮮半島の文字生活と比較してわかる。朝鮮半島でも日本と同じように、中国大陸から伝わってきた漢字を文字にしていたが、李氏朝鮮第4代王の世宗が15世紀半ばに、朝鮮固有の文字いわゆる「訓民正音（ハングル）」を創製し、そして知識人らの猛反対をも押し切ってそれを推し進め、ついに漢字を廃止し自国文字ハングルだけを使用することになった。自国の物こそ最高で、「ハングルは世界中の全ての言葉を表せる、最高の文字」だと宗教のように信じきっているありさまである。

それに対して日本は、朝鮮より600年以上も前に自国の文字を発明したのに、中国大陸からの外来文字「漢字」を「真名」と呼び「正統」と見なし、自国製の文字を「仮名」と位置づけ、「卑下」をしている。いかにもおかしい現象である。その原因は、言語自身よりも、日本文化の深いところにあるのではないかと思われる。内田樹氏の言葉を借りて言うと、「古来、この国は外来の概念を『正嫡』として歓待し、土着の概念を『庶子』として冷遇するという振る舞いを繰り返してきました。」（内田樹、2009）というが、まさにその通りである。「真名」「仮名」という呼び方の根源にあるのは、まさにこの日本の「辺境意識」だと思われる。

この「辺境意識」は、まず地理的な辺境意識を指していると思う。日本は、地図で見て

わかるように、大陸から離れていて、その四面が海に囲まれているので、まるで海に浮かぶ孤島のようなのである。特に航海技術が発達しなかった古代においては、海が「死」を意味することもある。広大な大陸に対する辺境意識が自然に生まれるだろう。

この「辺境意識」はまた日本民族の心理的・文化的なものをも意味している。

中日両国の古代史を比較してみよう。日本が打製石器を使い、狩猟・漁労と採集を主な生産手段にしていた時、中国はすでに堯・舜・禹の時代を経て、紀元前2070年前後に最初の奴隸制国・夏が出来上がり、そして商と周の青銅器文明を経て、鉄製品を製造し使用する春秋戦国時代に入り、孔子・孟子を代表とする諸子百家が出来て文化的にも繁栄を見せた。日本がやっと大陸からの移民のおかげで農耕が始まり、国家の誕生に向かって社会が胎動し始めたときに、中国はすでに秦によって初の多民族中央集権国家を作り上げ、そして漢が世界的にも大国となり、その領域がさらに拡大し、文化的にも秦漢文化として栄えた。

政治的にも経済的にもそして文化的にも中国に大いに後れを取った古代日本にとっては、中国大陸のすべてを崇めるのがむしろ自然の成り行きであり、宿命でもある。中国の歴史書『漢書』に「楽浪海中有倭人，分為百余国，以歲時來獻見雲（夫れ楽浪海中に倭人有り、分れて百余国と為る。歳時を以て來たり獻見すと示ふ）」とあるように、まだ文明社会に入ったばかりの倭の国の使者が、政治・経済・文化的に遥かに発達した中国の都を目の当たりにしたときにいかに驚いたかは、想像に難くない。その後の1000年以上の歴史は、ほとんど日本が中国大陸に一方的に学ぶ歴史である。強大な中国大陸に対して、日本は自分から進んで華夷秩序に入って、自らを

「辺境」に位置付けていたのである。

一民族の文化にも DNA があると思われる。日本民族はまだ自民族の文化が出来上がらないときに、自民族をはるかに超えている優位文化に遭遇し、その大陸からの外来文化に驚き、そしてそれをやむを得ず勉強するしかなかった。その劣勢とも言える心理、外来文化を上位文化とみてそれを習う習性が、むしろ当たり前のように、日本民族の DNA に植え付けられているのではないだろうか。「日本人にも自尊心はあるけれど、その反面ある種の文化的劣等感がつねにつきまとっている。それは現に保有している文化水準の客観的な評価とは無関係に、なんとなく国民全体の心理を支配している、一種のかげのようなものだ。ほんとうの文化は、どこかほかのところで作られるものであって、自分のところのは、なんとなくおとっているという意識である。」(梅棹忠夫、1998)と梅棹忠夫が指摘したが、まさにその通りである。

日本の文字との関連性で言うと、この辺境意識には二つのパターンがあるように見える。

①外来文化を「真」・「正統」とみる傾向がある。それは前述のような日本文化劣等意識と関係している。だから、せっかく自国の文字を発明しても、それを「仮名」と呼び、反対に外来の文字である漢字を「真名」と呼んでそれを正当化するのであろう。内田も指摘されたように、「原日本語は『音声』でしか存在しなかった。そこに外来の文字が入ってきたとき、それが『真』の、すなわち『正統』の座を領したのです。そして、もともとあった音声言語は『仮』の、すなわち『暫定』の座に置かれた。外来のものが正統の地位を占め、土着のものが隷属的な地位に退く。それは同時に男性語と女性語というしかたでジェンダー化されている。これが日本語の辺境語

的構造」である(内田樹、2009)。

②辺境だからこそ、「面従腹背」のことが許される。「日本列島は『王化の光』が届かない辺境であるがゆえに、逆にローカルな事情に合わせて制度文物を加工し、工夫することを許された」と内田が指摘されている(内田樹、2009)。前述したように、「仮名」は、『『仮』名』といっても、日本語の表記体系では「真名」とされる漢字に劣らない役割を果たし、しかも肝心の・日本的要素はほとんどすべて「仮名」で表す。身体実感や情動や官能や喜怒哀楽を適切に表すには、「仮名」しかない。それでも、形式上は「仮名」は誕生して1000年以上経っても、たとえ明治時代以降中国の衰退に伴っての漢字廃止論があっても、「仮名」は『『仮』名』のままである。

5 結びに代えて

日本は、むしろ漢字の本家である中国以上に漢字を開発、利用していると思われる。

漢字の生成原理を見極めたくて日本独自の漢字いわゆる「国字」の作成は、日本民族の卓越なる創造能力を物語っている。また、明治時代に西洋文化を猛スピードで吸収するにあたって作られた大量の「和製漢語」も、日本民族が漢字の発展に対する貢献ではないかと考えられる。そしてその「和製漢語」が、逆に本家である中国にまで輸入し中国語でも大きな存在感を誇っている。王彬彬氏の考察によると、現代中国で使われている社会・人文・科学の術語は70%前後までが日本製であるとのことである(王彬彬、1998)。

漢字を再生産するだけでなく、日本は漢字の価値を本家以上に認識し、そして付加価値を与えている。その代表に、鈴木孝夫氏が筆頭に上げられると思う。

鈴木孝夫が、イスラエルのヘブライ語起

用を例にし、日本人の「母国語に対する執着のなさ、無頓着さと、それを支えている大勢順応主義および便宜主義的言語観」（鈴木孝夫、昭和 50）を批判しながらも、「日本語は漢字という視覚を利用する手段の助けが、今後も絶対に必要なのだ」（鈴木孝夫著作集 5、1999）とし、漢字と仮名の併せ持つ日本語が、「人類の言語の未来を、いわば先取している」（漢字民族の決断、1987）とまで断定している。

漢字はまた日本人の生活の一部になっている。日本で数多い漢字能力検定試験の中で最大の日本漢字能力検定がある。その受験者数は、2002 年度以降毎年なんと 200 万人以上もいる。その年をイメージし、世相を現す「今年の漢字」の発表もまた日本人にとっては年末風物詩になって、マスメディアをにぎわしている。マスメディアといえば、テレビ番組では漢字の書き方、読み方などに関するクイズ番組もたくさんあるし、漢字がボケ防止・脳開発に役立つとして、漢字に関する本もたくさん出版されている。

こう見てみると、日本の辺境文化は、むしろ「外来」を「土着」に変える力があるようにも見える。ここまで来たら、もはや「真」も「仮」もない。本当は、「真」が「仮」で、「仮」が「真」の可能性も十分にある。要は、いかにして効率よく利を獲得できるかであろう。

【参考文献】

1. 中西進・山本七平（1991）. 『漢字文化を考える』, 大修館書店
2. 内田樹（2009）. 『日本辺境論』, 新潮社
3. 鈴木孝夫（昭和 50）. 『閉された言語・日本語の世界』, 新潮選書
4. 鈴木孝夫研究会（2012）. 『鈴木孝夫の世界第 4 集』, 富山房インターナショナル
5. 鈴木孝夫著作集 5（1999）. 『日本語と外国語』, 岩波書店
6. 橋本萬太郎・鈴木孝夫・山田尚勇（1987）. 『漢字民族の決断』, 大修館書店
7. 梅棹忠夫（1998）. 『文明の生態史観』, 中公文庫
8. 王彬彬（1998）. 「現代中国語の中の日本語「外来語」問題」, 『上海文学』随筆精品・第二輯・守望靈魂

On Japanese Culture from “Mana” and “Kana”

Gong Wei

Visiting Professor, Social System Research Institute

Chuo Gakuin University

Professor, Okayama Shoka University

Abstract

The character system of Japanese is undoubtedly the most complicated among world languages, for it incorporates Chinese characters, Katakana, Hiragana, Romaji etc. Chinese characters are borrowed from China. Based on such characters, Katakana and Hiragana are invented locally to match with the pronunciation system of Japanese. However, Chinese characters are called “Mana”, namely the “real name”, while Katakana and Hiragana are called “Kana”, namely the “false name”, meaning temporary and unorthodox words. These two names reflect Japan's “border culture”—legitimizing foreign cultures but depreciating its own native culture in their deep-rooted consciousness.